ふるさと御所 文化財探訪

⌘其の四十四⌘

古墳時代〈32〉

巨勢（許勢）氏の台頭（4）

蘇我氏の葛城進出

文化財課
☎60-1608

平成14年に條ウル神古墳が発見されました。巨大な横穴式石室と家形石棺の存在が話題になり、3月に実施した石室公開（現地説明会を含む）では1万人を超える人が見学しました。当時、この古墳の被葬者像を巡って、蘇我氏説と巨勢氏説がありました。條ウル神古墳については次号以降で詳しく述べることにし、ここではまず、蘇我氏が葛城という地域とどのように関わるのかについて検討しておきましょう。

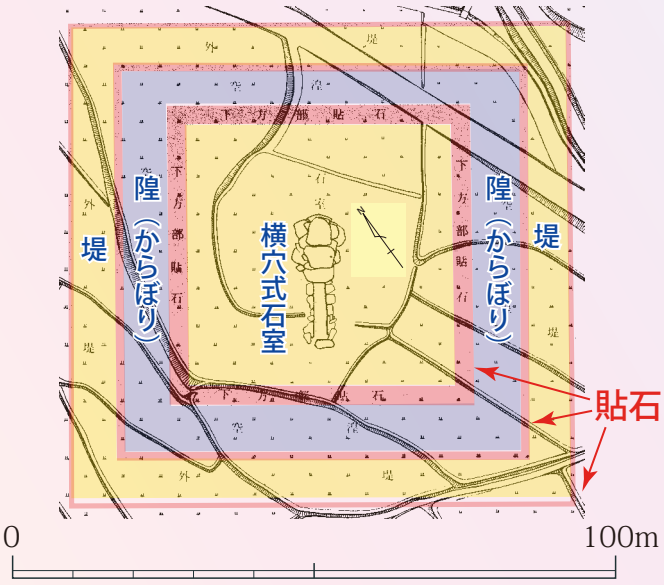

図１　石舞台古墳の墳丘平面図（S.=1/100）
（京都帝國大學文學部考古學研究室『大和島庄石舞臺の巨石古墳』、1937年から、一部改変）

図２　ハカナベ古墳（御所市大字南郷所在）
（写真提供：奈良県立橿原考古学研究所）

日本書紀の推古天皇三二年一〇月条に、蘇我馬子が推古天皇に対して、葛城県は元々蘇我氏の本拠なので頂きたいと願い出る記事があります。この申し出は、葛城氏の祖先である武内宿禰は、蘇我氏の共通の祖先でもあることに因んだものと考えられています。つまり元は葛城氏の所領であり、その本宗家滅亡後に葛城県となったものの、本来は葛城氏の兄弟に相当する蘇我氏に所有権があると主張したわけですが、実態としては、武内宿禰を介した同族関係は擬制的なもの（権威を高める目的で創作されたもの）と考えられていることから、推古天皇はこれを根拠のないこととして毅然とした態度で断ります。

しかしその子、蘇我蝦夷の代になると、皇極天皇元年の条に蝦夷は自らの祖先の廟を葛城の高宮に立て、八佾舞（天皇にしか許されていない群舞）を行い、天下を狙うことを歌に詠んだ、とあります。どうやらこの頃には蘇我氏は、葛城の一部を強引に我が物としたようなのです。このことをはじめ、馬子、蝦夷、入鹿と天皇をないがしろにする行為が目立った蘇我氏の本宗家は、そのわずか3年後には大化改新によって滅亡してしまうのです。

さて、蘇我馬子の墓として定説化しているのが明日香村の石舞台古墳です。巨大な石材がむき出しになっていることで有名ですが、ここで注目したい特徴は、方形の墳丘（一辺約50ｍ）の斜面と隍をはさんだ堤の両斜面に貼石を施している（図1）ことで、これは後期古墳としては珍しい墳丘構築法といえます。

そしてちょうどその頃、つまり7世紀に入る頃になると、葛城の山麓部にはミニ石舞台古墳とも称される古墳がみられるようになります。ハカナベ古墳（図2）、ドンド垣内5号墳（図3）は共に一辺20ｍ弱の方墳で、石舞台古墳と同様に墳丘斜面と隍をはさんだ堤の内側斜面に貼石を施していました。これらの古墳の存在は、蘇我氏の影響が7世紀に入る頃には葛城に及んだ考古学的証拠ということができるでしょう。したがって、條ウル神古墳の被葬者を蘇我氏に当てるのも根拠のないことではないといえます。蘇我氏か？巨勢氏か？次号以降、條ウル神古墳の被葬者像に迫ることにします。

（文責　藤田 和尊）

図３　ドンド垣内５号墳（御所市大字伏見所在）
（転載許可：奈良県立橿原考古学研究所）

犬・猫は正しく飼いましょう！　★散歩させるときは、必ず袋とシャベル等を持ち、フンの後始末をしましょう。